　　水の東西　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山崎正和

〔　〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。　　【発展問題】

　流れる水と、噴き上げる水。

　そういえばヨーロッパでもアメリカでも、町の広場にはいたるところにみごとな噴水があった。ちょっと名のある庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向を［　Ａ　］らして風景の中心になっている。有名なローマ郊外のエステ家の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎっしりと埋めつくしていた。樹木も草花もここでは添え物にすぎず、壮大な水の造型がとどろきながら林立しているのに私は息をのんだ。それは揺れ動くバロック彫刻さながらであり、ほとばしるというよりは音をたてて空間に静止しているように見えた。

　時間的な水と、空間的な水。

　そういうことをふと考えさせるほど日本の伝統の中に噴水というものは少ない。せせらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることはあれほど好んだ日本人が、噴水の美だけは近代に至るまで忘れていた。伝統は恐ろしいもので現代の都会でも、日本の噴水はやはり西洋のものほど美しくない。そのせいか東京でも大阪でも、町の広場はどことなく［　Ｂ　］が抜けて、表情に乏しいのである。

　西洋の空気は乾いていて、人々が噴き上げる水を求めたということもあるだろう。ローマ以来の水道の技術が、噴水を発達させるのに有利であったということも考えられる。だが、人工的な滝を作った日本人が、噴水を作らなかった理由は、そういう外面的な事情ばかりではなかったように思われる。日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象ではなかったのであろう。

　言うまでもなく、水にはそれ自体として定まった形はない。そうして、形がないということについて、おそらく日本人は西洋人と違った独特の好みをもっていたのである。

「行雲流水」という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前の感性によって裏づけられていたそれは外界に対する受動的な態度というよりは、積極的に、形なきものを恐れない心の現れではなかっただろうか。

　見えない水と目に見える水。

　もし、流れを感じることだけが大切なのだとしたら我々は水を実感するのにもはや水を見る必要さえないといえる。ただ断続する音の響きを聞いて、そのに流れるものを間接に心で味わえばよい。そう考えればあの「おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだといえるかもしれない。

問一　［　Ａ　］・［　Ｂ　］に入る語として最も適切なものを、それぞれ漢字一字で書きなさい。

問二　傍線１「音をたてて空間に静止している」とほぼ同じ内容の表現を、文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問三　傍線２「日本の伝統の中に噴水というものは少ない」とあるが、筆者はその理由をどのように考えているか。「西洋の空気は」から始まる段落の中の語句を用いて「日本人は～」の形で二十字以内で答えなさい。

問四　傍線３「それ」とは何を指すか。文中の語句を用いて二十五字以内で答えなさい。

問五　傍線４「目に見える水」とは具体的には何を指すか。文中の語句を抜き出しなさい。

問六　傍線５「我々は水を実感するのにもはや水を見る必要さえない」とあるが、このように言うのは、筆者が日本人についてどのように考えるからか。「日本人は……感性をもっていると考えるから。」の形で、五十字以内で説明しなさい。